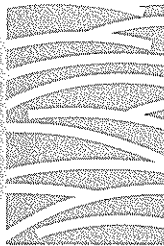


# 茂吉記念館だより

Vol.18  
 2015 / 12 / 15

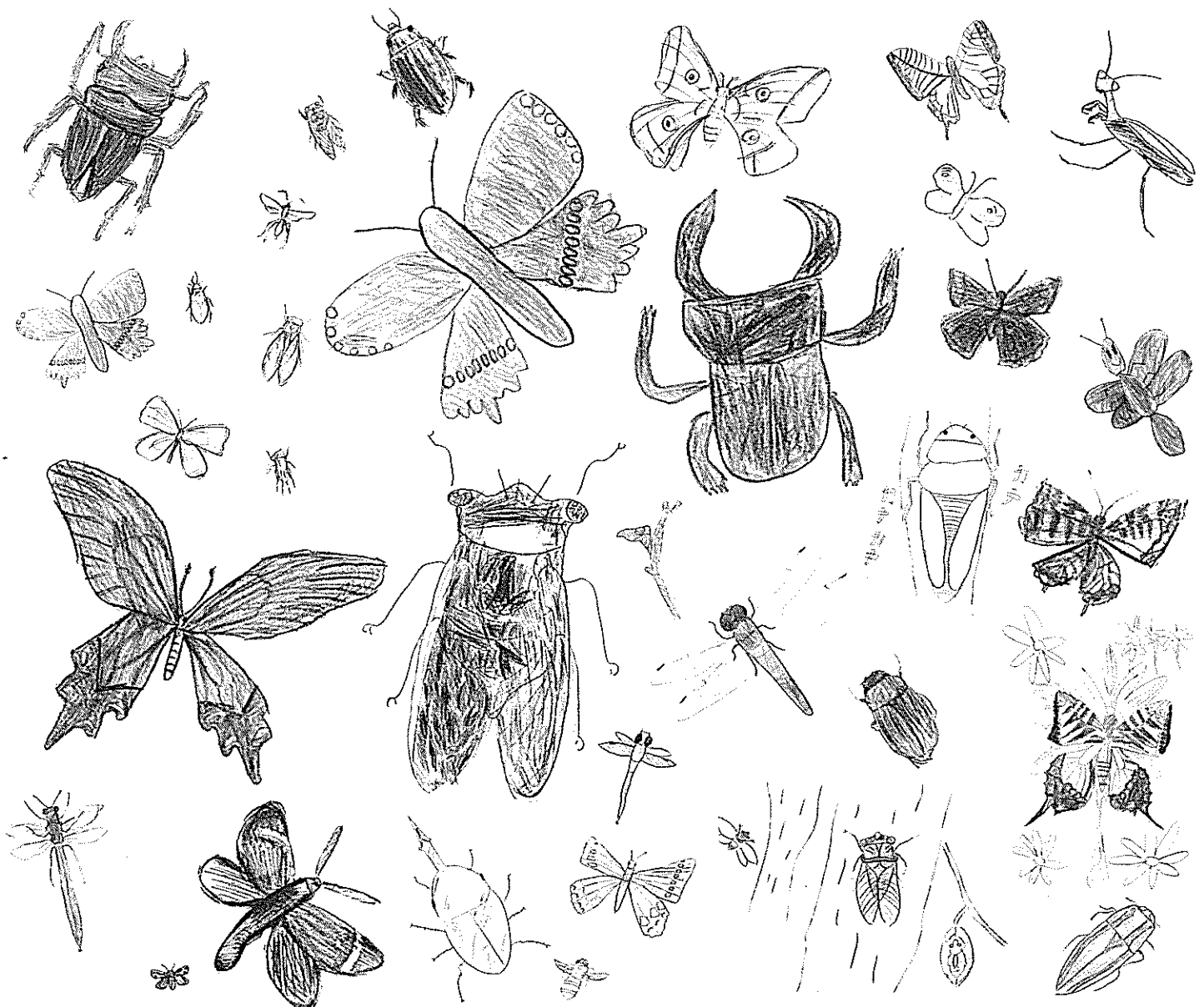
Mokichi Saito Memorial Museum



- 目次
- ・寄稿/花山多佳子「茂吉の食の歌『ともしび屋小園』より」 - 2
  - ・寄稿/谷岡亜紀「茂吉作品の映像性」 - 4
  - ・寄稿/牧野 房「茂吉先生礼讃」 - 6
  - ・館長随想「墓苑樹あららぎ」 - 8
  - ・定例歌会(概要/第5・6・7回高得点作品) - 10
  - ・資料紹介「新たな収蔵資料から」 - 11
  - ・短信(掲示板)/編集後記 - 12

齋藤茂吉記念館館長 秋葉四郎

本年度の特別展では、とくに当記念館・齋藤茂吉を身近に感じてもらおうような企画で実施した。(詳細は11頁掲載)  
 現在公開中のものを含めると三回開催したところであるが、その中で子どもと親しみやすい特別企画展「齋藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」では、これまでに無かった事業内容を核として取り組んだ。  
 ・昆虫標本と茂吉短歌の融合、昆虫写生画・コミック画の展示など、常設展示室とは趣が異なり、誰もが気軽に楽しめる内容で実現することが出来たことは、意義深く感じている。また、関連イベントとしてのトークショー&ギャラリートーク、地元若手演奏家によるミュージアムコンサート&ドリンクパーティーは、一九六八年開館以来初めての試みであったが、何れの行事も盛会のうちに執り行うことが出来、関係各位の理解と協力には、改めて感謝申しあげる次第である。  
 この頁に載せた昆虫画の力作は、会期中夏休みで訪れた子ども達も、館内貸出のスケッチブックに色鉛筆で、一生懸命描いた作品の一部である。思いがけなく多くの作品八十八点が集まったことは、大きな驚きと喜びであった。急ぎよ館内壁面に「スケッチ展覧会」と称した仮設ボードを設置し、作品提出後すぐ掲示して、来館者に特別展の展示の一環として深しき鑑賞してもらったことも、思い出深く心に残った。



\* 昆虫スケッチ画：齋藤茂吉記念館2015夏休み特別企画展「齋藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」を見学した子どもさんが描いたもの（会期中館内に掲示）

## 茂吉の食の歌 - 『ともしび』『小園』より

花山多佳子

斎藤茂吉には「食べる」歌が並はずれて多い。

おおざっぱに数えたところでも『赤光』8、『あらたま』12、『つゆじも』10、『遠遊』8、『遍歴』20、『ともしび』25、『たかはら』15、『連山』6、『石泉』11、『白桃』10、『暁紅』7、『寒雲』7、『のぼり路』4、『霜』16、『小園』31、『白き山』20、『つきかげ』41、という数にのぼる。見落としもあるので正確にはもっと多いだろう。

一般に歌集には食の歌というのは少なく、せいぜい数首、皆無なものも多い。あっても酒の肴とか、グルメっぽいものだったり、そのときの気分を表すアイテムとして詠まれがちだ。茂吉のように食べること自体に渾身の集中をもつて詠んだ歌人は稀有であろう。

全歌集の中でも目立って「食べる」歌が多いのが『ともしび』『小園』『つきかげ』である。『ともしび』は三年余にわたるヨーロッパ留学から帰国した時期の歌集だから、日本の食べ物を楽しみと味わうことが多かったようだ。

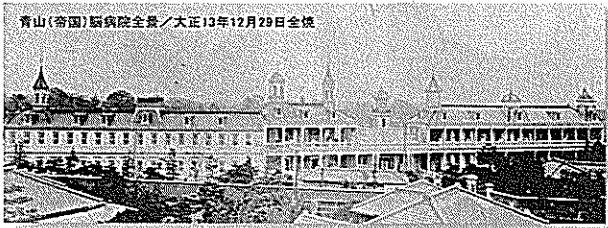
しかし何といつても『ともしび』で印象的なのは帰国して、全焼した青山脳病院の焼けあとに帰ったときの歌である。

やけのこれる家に家族があひよりて納豆餅  
くひにけり

かへりこし家にあかつきのちやぶ台に火焰  
の香する沢庵を食む

一首目の歌は「家族があひよりて」がごくめずらしく感じられる。茂吉の食べる歌には総じて家族が登場せず、孤食のおもむきがあるからだ。ひとりで食べるのは好きだったようで、留学中もドイツで採った蕨を、他の留学生に分けず「ひとり貪り食った」というエッセイもある。大病院では団欒にもあまり恵まれてはいなかったのが、焼けて初めて「あひよりて」という次第になった。それで茂吉が好きな納豆餅などをみんなも食べている。その非常時の様が「くひにけり」というぶつきらぼうな字足らずによく出ていると思うのである。

二首目は「火焰の香する沢庵」がすばらしい表現で有名。柴生田稔の『続斎藤茂吉伝』では、アララギに発表当時「ほのほの」が「ほのぼの」と誤植され「ほのぼの香する」として批評されたこと、茂吉が訂正したあとも、「ほのぼの」

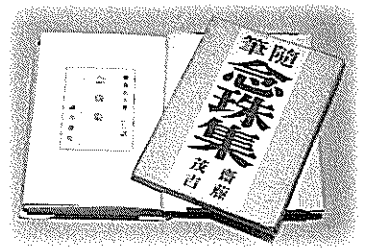


青山(寄園)脳病院全景／大正13年12月29日全焼

のほうがましである、と不評な歌だったことが書かれている。ふつうなら「ちやぶ台」「沢庵」という語彙はいかにも「ほのぼの」である。そこに「火焰」を挿入して、常ならぬ香を表出したところこそ、この歌のすごさであろうに。

話が逸れるのだが「納豆餅」の歌の次に「やけあとのまづしきいへに朝々に生きのこり啼くにはとりのこゑ」という歌がある。この生き残ったにわとりについては『念珠集』の中の「牡雞の記」にくわしい。最後に残った一羽の牡が鮠に殺されて、それを潰して家族で食べるところで終わる随筆である。この食べるさまがごく印象的なのであるが、この場面の歌は『ともしび』にない。「ぎぞの夜に叫びもあげず牡鶏は何かの獣に殺されてをり」とあるのみである。茂吉なら詠みそうな気もするし、茂吉だから詠まないという気もする。食の歌がこんなにあるからこそ、眺めていると、詠まれていないものが気になってくる。

肉はごく少ない。外国ではたまに登場するが、東京でだって洋食で食べているだろうに鰻ばかり。まあ詠まれる食材そのものが限られていて、味噌汁、納豆、蕨、魚、蕎麦、餅、米くらいだから、肉がないのに何のふしぎもない。ないのだが「肉食」を詠むことには抵抗感があつたの



斎藤茂吉著 隨筆『念珠集』 昭和5年8月12日鐘塔書院刊

かもしれない。「念珠集」の「痰」に「父は三山や蔵王山あたりを信心して一生四足を食わずにしまつた」とある。村人も飢饉でやむを得ず獣肉や家畜を食った、と「かてもの」にある。茂吉にも、その信心は受け継がれて

いるのではなからうか。満十四歳でひとり上京して養子になったからこそ、自分の出どころへの頑固なほどの拘りがあつたように思われる。「食」は単に嗜好の問題ではなかつた。

『小園』での食の歌の多さは戦時下という時代が大きい。すでに昭和十六、七年の『霜』のあたりから戦時の食糧事情の具体が垣間見えるのであるが、食を通して戦争の深まりが如実に伝わってくるのは茂吉ならではである。

大きな時にあたりて朝よひの玄米の飯も押しただかむ 『小園』  
麦の飯日ごとに食べばみちのくに我をはぐくみし母しおもほゆ

かしくよみがえるのだろう。郷里の飢饉のことを「かてもの」(『念珠集』)で詳細に記した茂吉であるから、食の乏しさについては「恣はたらにてわれあるべしや」という思いは強かつただろう。にもかかわらず、というか、しだいに情けなくなつてくる心理の推移が伝わってくるのがおもしろい。根っからの食いしん坊なのである。

開帳のごとき光景に街上の鰻食堂けふひらきあり 神田にて

鰻食堂がひらいているのを秘仏のご開帳にたとえるなんて、とびつくりして笑えてしまう。きつと入つて鰻を拝んだに違いない。いわゆる価値基準を度外視しているが、人の腑に落ちてくる真実味がある。教養人であるより前に、庶民感情が息づいている。

南瓜なつなを猫の食ふこそあはれなれ大きたたかひここに及びつ

昭和十九年に入つての歌。あろうことか、猫が南瓜を食つた。それをもつてして、大きな戦いの様相が表現される。「ここに及びつ」は、もう世も末だ、という感じだろう。当時だと、相当問題な歌ではなからうか。茂吉にすれば、猫ごときではなく、そのあわれはかりそのものではないのである。戦時の歌として記憶されている名歌と私は思う。

少しばかり隠して持てる氷砂糖も爆撃にあはば燃えてちり飛べ

ちやんと氷砂糖を隠しもつていたのだ。空襲も激しくなっている。「爆撃にあはば」から普通は「ちり飛ばむ」と推量になるところ、とつぜん「ちり飛べ」と命令形になる。やぶれかぶれの口走りの感がある。この心理がリアルだ。

これまでに吾わがに食くはれし鰻うなぎらは仏ほとけになりてかがよふらむか

鰻が仏になるという発想はどうい及びもつかない。しかも「かがよふ」などは。自分も空襲でいつ命を失うかもしれないという心境になつて、自分に食われた鰻を思うのである。死んだ茂吉の体から鰻らが仏になつて立ちのぼるようなイメージが浮かぶ。おかしみも誘われつつ、食というものの根源を思わせられるのである。

のがれ来て一時間いちじかんにもなりたるか壕がうのなかにて銀杏ぎんなんを食む

昭和二十年に入つたときの歌。壕のなかで銀杏をぼつりぼつりと食べている老人。なんとさびしい歌だろう。この年の四月、茂吉はようやく疎開に踏み切つたのであつた。



## 茂吉作品の映像性



## 谷岡亜紀

茂吉作品には不穏な映像性を持つ作品が多い。私はそこに茂吉の大きな魅力と現代性を感じている。映像性とは単なるカメラワークではない。現実把握のメソッドであり、それ自体、世界観（この世界の手触り・質感）を探り当て提示するものである。具体的に見たい。

氷きるをとこの口のたばこの火赤かりければ見て走ったり  
『赤光』

「悲報来」より。この連作の主眼は場面の緊迫感がすぐれて映像的・感覚的に捉えられている点にある。例えば、ビデオカメラを持って撮影しつつ走る感覚。カメラが様々なシーンを拾い、画像の揺れ自体が緊迫感を伝える。この歌には「をことこの口のたばこの火」とある。どこの誰ではなく「男」。ハードボイルドである。この感覚は、戦後イタリア映画のネオ・レアルスモ（新しいリアリズム）に近い。代表的な作品は、ナチスドイツ進駐下のローマをドキュメント・タッチで描いた、ロベルト・ロッセリーニの「無防備都市」である。そこでは、暗い映像によって細部のクローズアップ、ズームアップが多用されていた。この歌もまさにその感覚であり、しかも茂吉の方が時代的にはるかに早い。口の煙草。その先端の火の赤。走ることで画像が不

吉に揺れる。氷と火、冷えと熱の対比も鮮やかだ。ここには興奮と奇妙な冷静さが同居している。まさに特異で不穏な映像性による「ネオ・レアルスモ」である。

ガレージへトラックひとつ入らむと少しためらひ入りて行きたり  
『暁紅』

「少しためらひ」は単なる擬人法ではなく、ハンドルの切り返しをリアルに伝える。「入らむとす」「少しためらひ」「入りて行きたり」。一連三段階の動作をひと続きで描写し、時間経過の手触りを出した。これは映像表現に言う（フィルム）の「長回し」である。場面場面を細かく切断（カット）せずカメラで一定時間動きを追う。

長鳴くはかの犬族のなが鳴くは遠街にして火かもおこれる  
『赤光』

「犬族」「遠街」。いかにも不吉で不穏である。「火かも」は、現実の火そのものではなく、想像によつてその不穏な気配を察知・予感する感覚。その予感、茂吉自身の不穏な内面世界と呼応し、そして読者の深層心理の不安を刺激・増幅する。今から百年前、明治末年の帝都東京の闇の気配を直感した歌だろう。すなわち想像力が幻視させたフィルム・ノワールの物語である。

この作品の次には「暗黒にびようびようと犬は鳴く……」という歌が並ぶ。

おびただしき軍馬上陸のさまを見て私の熱き涙せきあへず  
『寒雲』

かたまりて兵立つうしろを幾つかの屍運ぶがおぼろに過ぎつ  
同

日中戦争のニュース映画に取材した作品とされる。一首目は、スペクタクルの高揚感。対して、その隣に置かれた二首目は、戦闘後の放心を捉えたドキュメント。こちらにはスペクタクルの高揚はない。ニュース映像の後ろに映り込んだ、戦死遺体を運ぶ医療衛生班の姿を、茂吉の目は捉える。フォーカスの遠近を「おぼろに」がよく伝えている。

赤光のなかの歩みはひそか夜の細きかほそきころろにか似む  
『赤光』

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも  
『あらたま』

沈黙のわれに見よとぞ百房の黒き葡萄に雨ふりそそぐ  
『小園』

暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死といへるもの  
『つきかげ』

光のコントラストが印象的な作品を拾ってみた。一首目。ざらついた夕方の光の質感が際やかだ。その残照は異様に赤い。「赤光」は周知のように阿弥陀経の「白色白光赤色赤光」から来ており、おのずと仏教的世界観を想起させる。ここでは、衰えてゆく夕光のイメージともあいまって、末法思想を連想させる。タイトルともなつた通り、歌集『赤光』には赤い色が多出する。それらはどれも、不安な深層意識の影を帯びている。幼時に見た「地獄極楽図」の血の赤以来、「赤」は茂吉の心の不吉な原風景となつた。二首目。部分的・限定的なクローズアップによる極端な単純化によつて、描写がおのずと思索性・象徴性・形而上性を帯びる。モノクロームの世界であり、沈黙の視覚化である。そこに、運命の手触りと言ふべきものが生まれている。三首目。「百房の黒き葡萄」。絵画的・写真的であり、心象風景を思わせる。ここでもまた、モノクロームの映像世界による、沈黙の視覚化がなされている。四首目。「薄明」とは明と暗の交差する地点であり、その光と影のコントラストが、生と死の対比となつている。下句は科学者(医師)としての、自らへの厳肅な運命の宣告である。

ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生れてゐたりけるかも 『あらたま』  
 岩の秀に立てばひさかたの天の川南に垂れてかがやきにけり 『赤光』

最上川の上空にして残れるはいまだうつくしき虹の断片 『白き山』

こちらは空間のコントラストを捉えた作品を拾つた。一首目。大らかな、茫洋とした空間の広がりと言語化される。「ゆらゆら」との映像的質感は、太陽光の揺らぎをも感じさせる。広々としたパースペクティブに、生まれたてのフレッシュでナイーブな質感が宿る。二首目。岩の上に立つ私と、天空に拡がる天の川。遠と近、天と地の遠大なコントラストである。大宇宙の中の、唯一無二の(われ)を発見した歌だと言える。三首目。「上空にして」という硬い、いわば(理)による把握によつて、画面構成を明確に示す。絵画のデッサンに通じる空間的構成意識が作品の持ち味である。

赤光のなかに浮びて棺ひとつ行き遙けかり野は涯ならん 『赤光』  
 かりがねも既にわたらずあまの原かぎりも知らに雪ふりみだる 『白き山』  
 いかづちのとどろくなにかがよひて黄なる光のただならぬはや 『つきかげ』

これらは、現実と幻想が混然一体となつた作品である。一首目は連作「葬り火」の一首。自殺した患者の野辺送りの場面が歌われる。その葬列の後ろを「めまい」しながら歩く茂吉である。仏教用語「赤光」が、この世とあの世の境

界のイメージを強調する。真つ赤な夕光の中に棺桶が「浮ぶ」というこの歌から私は、鈴木清順監督の映画でみた、日蝕の中の野辺送りの葬列のシーンを思い出す。あるいは、奇妙にねじ曲がった記憶と時間をテーマとしたアラン・レネの「去年マリエンバードで」(脚本アラン・ロブ・グリエ)を。それらは、時間意識が攪拌され一瞬と永遠が交錯する感覚において共通する。二首目にも、やはり現実がそのまま幻想であるような感覚がある。写生・写実を突き詰めると、おのずと象徴に至る、という言葉を思い出す。三首目は死を前にした歌。茂吉最晩年の作は、代作などの問題が言われて取り上げにくい部分があるが、この歌の特異な感覚は、出発点である『赤光』の、「野は涯ならん」のイメージとあきらかに地続きであり、仏教的・説話的世界でも共通する。現実と幻想の区別が混濁し、まさに全てが混然となつた中で、虚と実、生と死が不可分となる。このただならぬ黄色い光からは、否応なく「黄泉」という語が思い出されて戦慄する。死を前にした茂吉の脳内にフラッシュした映像であり、予知夢であつたと私には思える。



斎藤茂吉(昭和12年)

■ たにおかあき 歌人、心の花

※/虚写的・象徴的・退廃的な指向性を持つ犯罪映画の総称  
 #/遠近法・遠景・遠望

## 茂吉先生礼讃

### 牧野 房

山形文学会発行一九八五（昭六〇）年九月私  
は、エッセイ集『私の九月』を編んだ。

読んで下さった藤沢周平さんにすぐお礼の葉  
書を、しばらくしてから書評のような便箋六枚  
にわたる手紙をいただき、優しくあたたかいお  
心に驚き感動したのだった。その後第三集に公  
表を許してもらっているのので、その一部分を抄  
出する。

：これまで何のイメージも思いうかばなかつ  
た郷土の歌人たちがわかにかに親しくなつたの  
を感じました。牧野さんに感謝しなくてはな  
りません。：「哀草果先生との歓談」なども  
短い文章の間に哀草果さんの人柄がよくとら  
えられているのに感心しました。しかしエッ  
セイIIを支配している圧倒的な印象は斎藤茂  
吉なんですね。牧野さんのエッセイは、歌碑  
というものから、あるいは人の側から、ある  
いはアララギの歌会からとさまざまな方角か  
ら偉大なる茂吉を描いているといった趣き  
があります。

私も『白き瓶』を書いてから茂吉が好きにな  
ったのですが、いま愛唱しているのは、『つ  
ゆじも』の中のつぎの二首です。

あまつ日は松の木原のひまもりてつひに  
寂しき蘚苔を照せり

高原の月のひかりは隅なくて落葉がくれ  
の水のおとすも

この後、エッセイIの評に続くが、昭和六十  
二年二月二十日の日付である。周平さんの小説  
は、どれも登場人物と風景が一体化した描写で、  
読者には髣髴とその場面が浮かんでくるが、こ  
のような幽邃な叙景歌を好む周平さんであるこ  
とに納得し大きな喜びとなった。

また、あらゆる面から偉大なる茂吉を描いて  
いると言われれば全くその通りで、アンチアラ  
ラギの友人達からはその頃「あなたは茂吉以外  
の歌人を知らないのか」といつも揶揄されていた。  
顧みれば、女学校一年生の時国語教師原知一  
先生が担任となり、授業の度に訳もわからず茂  
吉の歌を暗誦させられ短歌を作るように教えこ  
まれた。短歌とは偉い人が詠むものでなく、誰  
でもが詠めるというカルチャーショックを受け  
たのもその時である。



豆類アララギ歌会にて(宮内 蓬萊院 昭和22年)  
斎藤茂吉(右)と大道寺吉次(左)

戦後一九四六（昭  
二一）年原知一先生  
と地元の歌人黒江太  
郎氏との合意により  
宮内アララギ会が結  
成された。翌年の二

十二年五月十八日、大石田に疎開中の茂吉先生  
をお迎えし、宮内の蓬萊院で置賜アララギ歌会  
が開催された。当時宮内を離れていた私は、茂吉  
先生にお会いする千載一遇のチャンス逃した  
が、敬慕してやまない黒江太郎氏、金子阿岐夫  
さんには歌会のためには茂吉先生のことを伺った  
ことを思い、「ご恩をかみしめている現在である。

第一回斎藤茂吉追慕全国（短歌）大会は、一  
九七五（昭五〇）年五月十四日上山で開催され  
た。「群山」の扇畑忠雄先生はじめ黒江氏もこ  
の会の運営委員をされ、当時の墓前会の記録文  
をと言われ拙ないながら書き上げた。

今思うと、これからは毎年『斎藤茂吉記念（追  
慕）歌集』に出詠し、大会に出席するようにとの  
無言の教えであったような気がする。以来二〇  
一四（平二六）年第四十回斎藤茂吉記念全国大  
会には幸いにも第四十集迄連続出詠したという  
ことで感謝状をいただいた。全国で六名のみで  
参会の多くの方々にはプロジ  
エクターで紹介されて感謝  
で胸がいっぱいになり忘れ  
られない記念の日となった。  
この大会では年々斎藤茂  
吉短歌文学賞受賞者の貴重  
な講演を聞くことができ、



斎藤茂吉追慕全国大会墓前会の折(宝泉寺 昭和60年)  
写真中央和泉安の茂吉夫人斎藤輝子と筆者(左)



斎藤茂吉追悼全国大会歓迎レセプションにて(平成2年)  
右から結城晋作、金子阿岐夫、富樫茂太、実智子夫妻、筆者

かつては輝子夫人や茂太先生ご夫妻とも親しくお話をする機会もあった。また全国の茂吉を愛する歌人の方々とお会いしてかけがえのない恩恵を受けたことを有難く思っている。

茂吉先生の警咳に接し、金子阿岐夫さん、茂吉記念館の研究員だった高橋宗伸さんの二人とは同結社で共に励み導いていただいた。思えば

茂吉先生にも中には平俗な歌がなどと生意気なことを言つて、阿岐夫さんにひどく怒られた思い出も懐しい。今は幽明境を異にし、頼ることもできずさびしい限りである。

歳を重ねても知らないことの多い私は、大石田在任の「塔」会員で活躍中の富樫榮太郎さんの紹介で「斎藤茂吉を語る会」に入会している。

この会は、会長は茂吉研究家で有名な藤岡武雄氏で、歌人斎藤茂吉を色々な視点から捉えて語り合う会で、二〇一〇(平成二二)年三月二十八日に江戸東京博物館会議室で設立記念大会が開かれ以来現在に至っている。茂吉記念館々長の秋葉四郎氏もこの会で講演をされている。

高齢の私は、参会はなかなか叶わず会報を待つて学び楽しんでいるが、昨年は、戦後の代表歌集『白き山』の世界について研究が進められ岡井隆氏の講演があった。シンポジウムもあり

「討論・茂吉再発見『白き山』を中心に」の鼎談の記録が特に興味をひいた。

パネラーは雁部貞夫、富樫榮太郎、石川美南の諸氏である。各々が「茂吉歌集ベスト3」と注目した歌五首、疑問のある歌二首を挙げて述べる方法で、それぞれの鋭い見方に注目した。しかし、より私の心を捉えたのは、富樫さんの大石田在任ならではの到底できない発見で『白き山』後記にある大石田の人々への茂吉の謝辞についてであった。

私は『白き山』が好きで、幾度も訪ねている大石田は特に親近感がある。後記には二十二年に宮内へ来られたことも明記され、細かく記した茂吉先生の一つ一つの言葉を味わいながら何度か読んでいた。その中で、

：私は大石田に二年ゐた。その間、庄司喜與太、土屋貞吉、庄司たけよ、高桑祐太郎、富樫忠也；

とそのあと十七名計二十二名の方の名が列記されて

：諸氏の深き芳情を感謝する；

という記述に私は、何と律儀で謙虚な書きぶりであろうか。こんなに沢山のお世話になった方々の名をあげているが、いささかその順序に首をかしげた。先生なりに苦労されたことだろうなどと勝手な想像をしていた。その疑問が此のたび解決したのである。

発表によると、聴禽書屋を提供してくれた二

藤部兵右衛門は十三番目、万端世話をした金子阿岐夫さんの父君板垣家子夫は十一番目、富樫さん本人の父君富樫忠也は五番目である。世話になった順からすると腑に落ちぬが、実はこれは大石田の町の家並の南から北へ列記したためという。恩義のある順ではなく、書き落さないように家並の順に氏名を記した茂吉であり、そこに西欧の合理主義を見ると富樫さんは分析している。

私にはどうしても思いつかなかったことだった。医師である茂吉先生本来のものなのか西欧で身につけた合理主義なのか、屋並の順であれば皆平等であり、変な憶測をされる心配もない。二年間この地に暮し、病も癒えて別れる大石田の方々への謝意と思いやりの心に溢れた後記に、再び思いを深くしたのはいうまでもない。

高齢となった私にとって、少女の頃とは少し違った意味で茂吉先生礼讃は、最上川の流れとともに滞ることはないだろう。



斎藤茂吉歌碑(最上川遊白波の…)建立の折(大石田泉松寺 昭和48年)  
前列左から金子阿岐夫、筆者、伊馬春郎、後列左から西谷博空、富樫茂太



まきの ふさ  
歌人富樫「白き山」



## 墓苑樹あたらぎ

秋葉 四郎

宝泉寺の斎藤茂吉墓苑樹「あたらぎ」がこの夏の熱暑に遂に枯れてしまった。私は昨年の秋、一枝のみ青い葉を残すこのアララギはこの冬を越せまいと思っていた。

墓苑樹のあららぎつひに絶えなんかおほよそ枯れて冬を迎ふる

しかし、さすがに寒さに強いらしく、今年の五月の茂吉墓前祭に行ってみると、一枝のみながら青い葉が生き生きとしげり、一樹全体も復活する勢いにみえた。

枯れかかる墓のあららぎ夏くれば一枝のみ  
の葉に力あり

それが今年の八月の猛暑に葉が朱く枯れ、あつけなく朽木となってしまうのである。

十年ほど前から私は、斎藤茂吉記念館にかかわって、月に一、二度上山を訪れるようになって

以来、努めて宝泉寺の茂吉墓前に頷ぎいた。その都度、この茂吉を偲ばせる「あたらぎ」が、傷んでゆくのが気になっていった。幹に布が巻かれて手当てを受けたりしていたが、見るたび心細い有様になってくる。ある時は積雪に耐えきれず大きな枝が折れて痛ましさが増した。

短歌誌「アララギ」の歌人が一位ともいうこのあたらぎを愛するのは「阿羅々木」創刊者蔵以来である。蔵真は山林家で、樹木に詳しく、「あたらぎ」を信濃から取り寄せ庭木にもしていた。明治四十二年十月、師事した正岡子規の七回忌に合わせ、根岸短歌会系列の雑誌を作るにあたって、笏の材料となり「一位」ともめでたく呼ばれる銘木でもあるから、雑誌名としたのであったろう。

茂吉の歌にも多く出てくる。

アララギのくれなゐの実がこの園にめざむるばかりありと思ひきや  
『遍歴』

留学中にベルリンの「植物園日本部」での遭遇だから、殊更の感慨があったことが思われる。私の経験でもドナウを辿る旅をしたとき、ドナウ川辺に真つ赤な実がまさに「めざむるばかり」輝いているところに出あっている。植物園でなくても、広く自生しているように見えた。

墓のべにあたらぎの木を植ゑむとて涙をながし語る友はや  
『ともしび』

島木赤彦一周忌に諏訪へ行った時の歌である。「アララギ」に貢献した故人を偲んで切に訴える友に、赤彦を偲ぶ木として「あたらぎ」がふさわしいから、当然共感しているところである。

たぎち行く川にむかひてあららぎのひよろひよろとしたる孤木たてり  
『暁紅』

などという作もある。川のほとりに生え育った一本の木に過ぎないが、「あたらぎ」故に看過できないのである。「ひよろひよろとしたる孤木」に籠る感情は、茂吉ならではのものと言える。

アララギを吾に呉れけりアララギの若木よろしと友等がいひて  
『つきかげ』

昭和二十六年の作。前年十一月に新宿区大京町の新居に移った。最晩年の住まいだから、友人の配慮が身に沁みたはずである。



斎藤茂吉の甥里上山市金瓶の生家(守谷家)菩提寺 宝泉寺境内に建つ茂吉の墓(左)と佐原隆石の墓(右)

昭和十二年、茂吉五十四歳(満年齢)のときに、弟高橋四郎兵衛によって、郷里宝泉寺の隆忠上人と並んで茂吉の墓が予め用意されるといいう話が進められた。茂吉は喜び、意欲的に自ら戒名を考え当時



の住職の助言をうけて決定し、和尚より授けてもらうべく手順を踏み、揮毫までしている。その三年前蔵王山頂歌碑に腕を振るつた石工が刻字しその墓石は、昭和二十八年まで、斎藤十右衛門の土蔵に保管されていたという。

宝泉寺の墓苑に茂吉の墓予定地が確保されたころに、この「あららぎ」は植えられている。

甥高橋重男が書き残している。「桜の咲く頃になって、西郷村阿弥陀地から、雌木のアララギをもとめ、出入りの植木屋と馬車で金瓶に運んで、墓地に馬酔木をそえて植えた」（『斎藤茂吉全集』月報24）。

昭和二十年の冬に茂吉を訪ねた土屋文明もこの墓予定地について書いている。「それから令弟と三人で、故郷墓の、予定地といふのに、案内された。令弟がその人を前において、墓場の説明をわたしにされる口調など、相変らず強引だなど思ったが、御本人の故人は、実に楽しさうに、己の墓になるべき地を踏み、予め植えられたアララギの若木の木末をなでて、喜んで居つた」（『月報11』）。

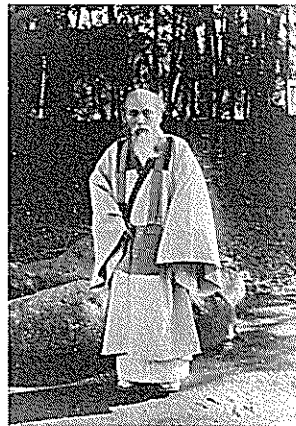
更に何時の事かはつきりしないが、葦澤榮一も奥羽本線の列車から茂吉と共にこの「あららぎ」を見たことを書いている。「『葦澤君、ほれ、ほれ、あの宝泉寺のアララギの下に己の墓が立つんだ。』金井駅を出て間も無く窓硝子に額をつけるばかりにして外を見ておられた茂吉先生が、向い座席に坐っている私に、にこにこ顔で

仰言る。」（『新アララギ』2002年2月号）。

とにかく茂吉自身がこの故郷の墓をよるこび、墓苑樹「あららぎ」に心を寄せて居たことがわかるのである。

少年茂吉の天才を早くから見抜き、書道や読書の、いわば英才教育を施し、茂吉を大成させてくれた佐原隆応の傍らだから、自らの墓の予定地を茂吉はことさら喜んだのかも知れない。

こうして墓に植えられてから七十八年が過ぎて茂吉の墓苑樹「あららぎ」は枯れてしまったのである。



宝泉寺住職 佐原隆応

茂吉の墓の朽木となった「あららぎ」を見つづ私には、謡曲『遊行柳』が重なって思われてくる。

ひとりの遊行僧が白河の関を越えたころに、老人の姿をした朽木の柳の精に出会う。その老人に案内されて古塚の上の枯れた柳を見る。由来を質すと、昔西行が旅をしこの柳の木陰で休み歌を残しているところだと言い、

みちのべにしみづながるる柳かげしほしとてこそ立ちとまりつれ 『新古今二六二』

という歌が示される。やがてこの柳が成仏できているというのである。

草木といえども、成仏の縁を結んでよるこびとなるというテーマで、この遊行僧によって、めでたく西行の朽木の精は柳観音として成仏を得ることになる。

さて、茂吉の墓の朽木「あららぎ」はどうか。現住職によって成仏の縁を結ぶことは間違いないとして、朽木には永遠に「文殊菩薩」が宿るのではあるまいか。私にはそう思われてならない。故郷を離れる少年茂吉のために、隆応が自ら尊敬していた大書家中林梧竹に頼んで、梧竹真筆「大聖文殊菩薩」を贈っているからである。



大聖文殊菩薩 梧竹真筆

香を焚き、隆応が読経する中、おもむろに書き進められた梧竹入魂の一書と言われている。

こんな経緯を知っているせい、夕べひと時、枯れてなお莊嚴にたつ茂吉の墓苑樹「あららぎ」に向っているとあきらかに金色の光を放つて見えた。

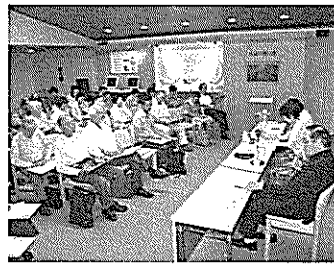
あららぎの朽木が金にかがやくはわれの幻視か文殊菩薩か

あきはしろう（館長）

第5回  
第6回  
第7回

定例  
歌会

第6回定例歌会  
(平成27年8月22日)



茂吉記念館事業として  
始めた定例歌会は三年目  
を迎え、第五回平成二十  
七年四月二十六日・第六  
回同八月二十二日・第七  
回同十一月八日、記念館  
内集会室を会場に行いま  
した。

各回とも、参加者が事  
前に一人一首の短歌を一覧表化(名前を伏せ)  
し、気に入った短歌を五首投票し得点数で順位  
を決めました。

今年度は、講師の評を多くしてもらいたいと  
の参加者からの希望により、時間の都合上参加  
者の感想は上位高得点のみとし、全作品につい  
て講師の秋葉四郎館長から丁寧な歌評をいただ  
きながら進行しました。

初心者・実作経験者・居住地域を限定しない  
超結社の歌会として、定員四十名のところ毎回  
五十名を越し、限られた時間内ながら充実した  
歌会になりました。以下各回の高得点作品と講  
師選作品を紹介します。  
(敬称略)

第5回

\*互選一位/ふた年を育てし若牛売る朝に妻は  
背を撫で語りかけおり 半田賢一

\*互選一位(同点)/憂ひさへ生きゐることの証  
かと花冷しるき夜の街行く 折原廣子

第6回

\*互選一位/プールより帰る少女らの日焼けせ  
る足のびやかに自転車をこぐ 山川ひろみ

\*互選二位/まぼろしの声をさながら聞くごと  
く原爆写真展しづかにめぐる 加藤由紀子

\*互選三位/朝日背に桜桃消毒してをれば噴霧  
の中に小さき虹立つ 武田清一郎

\*互選三位(同点)/身障の夫を乗せんと只管に  
還暦を過ぎ免許取りにき 大澤一枝

\*互選三位(同点)/在りし日の母種多くれし白桔  
梗ふたつ咲きたり今日終戦の日 早坂富美子

\*互選三位(同点)/年重ね曖昧なまま相槌を打  
つこと増えし夫との会話 石垣厚子

○秋葉四郎選/夏休みの加州の孫と茂吉親子の  
昆虫展見るお伴は楽し 水澤タカ子

第7回

\*互選一位/大津波に逝きし御霊かひぐらしの  
声沁みわたる浄土ヶ浜に 沼沢 修

○秋葉四郎選/建築の高き足場に若き女性ヘル  
メット動ごく舞ふがごとくに 松木勝蔵

\*互選三位(同点)/白壁に校章光る新校舎児ら  
の歓声響く日を待つ 山川ひろみ

\*互選三位/四年過ぎ不明者捜索まだ続くいず  
くに眠るやあまたの靈魂は 多田 昇

\*互選二位/捨てがたき綿入れを膝の上に置く  
縫目乱れし母の晩年 富川静枝

【総評】(第7回)

回を重ねる度歌が上等になっている。  
若い人の参加も増え自在に幅が広がって来た。

あつまりて歌をかたらふ楽しさはとほく差  
しくる光のごとし 『つきかげ』

斎藤茂吉の歌のごとくに集まって歌を語り、人  
生の境涯の影をこめた感動的な歌を詠みあいた  
い。と講師の秋葉四郎館長の総評で締め括りま  
した。立冬の暮れ初む  
短い時間を惜しみなが  
ら、歌会終了後の展示  
解説「ギャラリートー  
ク」、そして会場の集  
室にて乾杯「懇親会」  
を行い、遠方からの参  
加者・講師・運営関係者  
ともに楽しい時を過ご  
す事が出来ました。



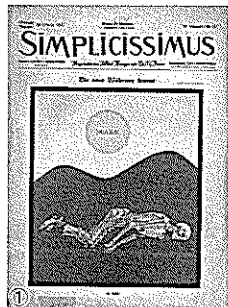
記録員加藤由紀子(上山市在住)

# 新 たな 収蔵資料から

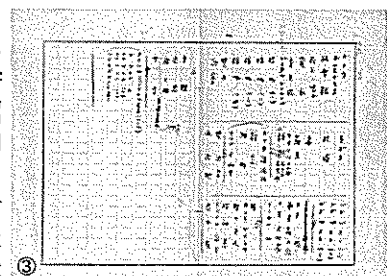
近年の新たな収蔵資料のひとつに、斎藤茂吉の「滞欧随筆」原稿および単行本発刊のための資料がある。

「滞欧随筆」は、大正十年末から十二年まで、茂吉が欧州に留学した時の体験を記した随筆群である。帰国後、「改造」「中央公論」などの諸雑誌に発表されたが、単行本として刊行されることはなかった。もともと茂吉には早くから単行本化の意図があり、『ドナウ源流行』として「昭和四年、岩波書店で発行される手筈のもとに、体裁などの打合せも済み、挿絵の製版まで出来上った」（\*布川角左衛門「この全集が計画された頃」全集月報21、昭31・2）という。しかし「遂に本文の原稿を渡されることなく」（前同）、二十年余りが過ぎてしまった。

再び単行本化の話が上がったのは、昭和二十五年のことである。二月二十二日付の布川氏宛てた書簡で、茂吉は「『ドナウ源流行（行）』と『山上の蕨』と兎も角も二冊御出し願上ます」と書き、その後、日記によると昭和二十六年十一月二十三日に布川氏に原稿を渡している。布川氏は、この二冊のための原稿の写真を、「挿絵にされるつもりといわれた数枚の写真、ドイツから持ち帰られたという新聞漫画」また、墨で書かれ、朱筆の加えられた目次風のものも見出された（前同）と述べ



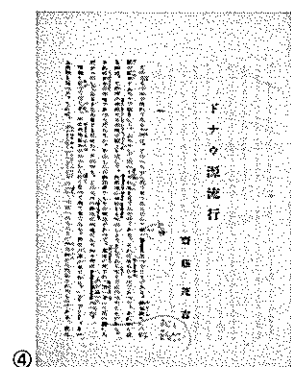
① ②



③

なぜ昭和四年に原稿が渡されることなく二十余年も過ぎてしまったのか。茂吉に師事した佐藤太郎の『斎藤茂吉言行』に、茂吉の発言として次のような記述がある。「西洋の紀行（『滞欧随筆』）などで、抜刷に手をいれたのがあるんだが、どこかへつつこんじゃったもんだから。今年の夏は箱根もどうなるかわからないが、そういういままでのものを整理しようかとおもっている。（中略）西洋の紀行は平和時代のものでないが、時代がよくなつて、没後になるかも知れないが出来るような時期が来れば岩波から出して来よう。岩波で作つてもらつた写真版が出て来たらよ。あの写真なんかドイツの悪口がはいっていていまはぐあいが悪い。金貨マルクがお月さまになつていゝんだから（漫画の写真版のこと）」（昭和十九年五月二日）。この「漫画」は、挿絵にするつもりだった前述の新聞漫画のことだろう。茂吉が留学していた当時、インフレが進行するドイツで、マルクの価値が下落していたことに対する風刺画が描かれている。そのため、茂吉は「いまはぐあいが悪い」と考え、いつか戦争が終わつたら出版しようと考えていたようである。

また、「中央公論」大正十五年四月号に掲載された「ドナウ源流行」の抜刷には、茂吉による加筆・修正が加えられており（写真④）、雑誌掲載後も単行本発刊のために推敲を重ねていたことがうかがえる。たとえば最初の一文では、「この息もつかず流れてゐる大河は、どのへんから出て来てゐるだらうかと熱心に思つたことがある。」の「熱心に」が削除されている。また、雁を眺めている場面では、「僕は、春の Donau に浮寝してゐる雁は、短歌になるだらうと思つた。」の「短歌」が「抒情詩」に修正され、さらに続く一文、「慌しく明暮れて、短歌のことも余り考へないのであつたが、ここへ来てから、歌ごころが少しづつ湧くのを感じた。」が削除されている。ここで、昭和四年二月二十六日の茂吉の日記を見ると、「ドナウ源流行ノ文章ヨミタルニ厭味多シ」という記述がある。この「ドナウ源流行」が、単行本『ドナウ源流行』を指すのか、随筆「ドナウ源流行」を指すのか定かではないが、少なくとも随筆「ドナウ源流行」の加筆・修正の目的として、「厭味」を取り除く意図があつたものと思われる。他の随筆についても、同様に推敲を重ねていた可能性が高い。それが、布川氏に原稿が渡されなかつた一因と考えられることもできるだろう。



④

（文責）後藤明日香

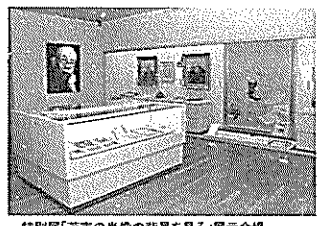
\*布川角左衛門

岩波書店編集者の頃斎藤茂吉と親交した。昭和三十一年（一九五六）年、岩波書店を定年退職後、栗田書店社長、筑摩書房管財人・代表取締役などを歴任。

**短  
信**

■講座事業／定例歌会(第五回)第七回  
本年度講座事業の一環として、当館の周知・誘客、短歌普及・実作向上などを目的とした超結社の歌会形式で、一昨年度・昨年度からの継続事業として三回実施した。第五回(平成二十七年四月二十六日)・事前投稿歌数六十首・参加者五十一人／第六回(同年八月二十二日)・事前投稿歌数五十八首。参加者五十五人／第七回(同年十一月八日)・事前投稿歌数五十五首・参加者五十一人。懇親会参加者三十九人。会場は各回共館内集會室。※高得点作品ほか詳細は本紙十々に掲載。

■訃報／片野達郎氏 当館前館長・東北大学名誉教授・文学博士(国文学)／平成二十七年五月十一日死去(八十七歳)／葬儀告別式は五月十四日に仙台市青葉区のセレモニーホール仙台で執り行われた喪主(長男片野道郎氏)／館長在職期間(平成十七年七月から同二十五年六月まで(八年間)／主著『日本文芸と絵画の相関性の研究』斎藤茂吉のヴァンゴッホ』『日本文芸論叢』、研究論文『茂吉と実朝』、紺の最上川『斎藤茂吉論』ほか。



特別展「茂吉の肖像の背景を見る」展示会場 館内守谷夫妻記念室

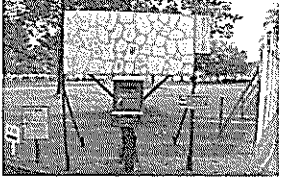
■特別展 \*「茂吉の肖像の背景を見る」会期(平成二十七年四月十二日から同年六月三十日まで)／会場(館内守谷夫妻記念室)／常設展示資料の補足と茂吉の魅力・作品などについて、より深く理解するために開催。特に茂吉を描き写した肖像画・肖像写真を資料を中心として、描写・撮影当時の茂吉とその周辺の様子を、関連資料とともに紹介し、茂吉の人となりを探求した。／主な展示資料(茂吉肖像画(八幡白帆・中村研一・鈴木信太郎・金山平三・加藤洵)ほか、展示点数32点。

\*2015夏休み特別企画展「斎藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」会期(平成二十七年七月十九日から同年九月二十三日まで)／会場(館内守谷夫妻記念室)ほか



特別企画展「斎藤茂吉と北杜夫の親子昆虫展」展示会場

少年の頃から昆虫に興味を持ちはじめた斎藤茂吉の次男北杜夫(斎藤宗吉)の昆虫標本・関連イラストをはじめ、茂吉が詠んだ昆虫歌とその作品など、親子の昆虫に対する意識を対比しながら、夏休み期間中の小・中学生・高校生をはじめ誰しもが視覚的に楽しめる内容により開催。(公益信託 荘内銀行ふるさと創造基金助成事業)／主な展示資料(昆虫標本、昆虫額(北杜夫解説・茂吉歌・乾燥昆虫)、茂吉の昆虫歌(短冊・原稿・書簡・著書本等)、日本昆虫協会所蔵資料、『コミック版どくとるマンボウ昆虫記』原画、『マンボウ思い出の昆虫記』挿図ほか、展示点数61点。※記念イベント(七月二十六日(日)15時〜18時30分) \*「トークショー」(斎藤由香氏(北杜夫長女・エッセイスト)講話)どくとるマンボウ家の素顔(ユーモアを大切にイキイキと生きる)・館長との対談講演(斎藤茂吉と北杜夫の昆虫逸話あれこれ)／会場(館内集會室) \*「ギャラリートーク」(昆虫解説)／新部公亮氏(日本昆虫協合理事・歌等解説)／館長(会場)館内守谷夫妻記念室 \*「ミニシアター」(コンサート)かみのやまの演奏家が奏でる(ふるさと)の夏(演奏)伊藤萌(トランプ)・神谷明希(ピアノ)演奏曲(大さき聖(斎藤茂吉作歌)・日本のあさあけ(斎藤茂吉作詞)・Summer(久石讓作曲)ほか)／会場(館内ロビー) \*「ドリンクパーティー」(かみのやまワインとソフトドリンク&茂吉・北杜氏が好んだ食材あれこれオーダブルの夕べ)／会場(館内集會室・ロビー) ※会期中の書籍販売(二冊)北杜夫原作・小林進治画コミック版『どくとるマンボウ昆虫記』小学館刊、北杜夫著『マンボウ思い出の昆虫記』信濃毎日新聞社刊。※会期中の付帯展示(昆虫スケッチ画の「昆虫スケッチ展覧会」)／会場(館内ロビー)壁面／見学者



かみのやま温泉全国かかし祭「茂吉短歌ポストかかし」昆虫スケッチ画の設置

少年の頃から昆虫に興味を持ちはじめた斎藤茂吉の次男北杜夫(斎藤宗吉)の昆虫標本・関連イラストをはじめ、茂吉が詠んだ昆虫歌とその作品など、親子の昆虫に対する意識を対比しながら、夏休み期間中の小・中学生・高校生をはじめ誰しもが視覚的に楽しめる内容により開催。(公益信託 荘内銀行ふるさと創造基金助成事業)／主な展示資料(昆虫標本、昆虫額(北杜夫解説・茂吉歌・乾燥昆虫)、茂吉の昆虫歌(短冊・原稿・書簡・著書本等)、日本昆虫協会所蔵資料、『コミック版どくとるマンボウ昆虫記』原画、『マンボウ思い出の昆虫記』挿図ほか、展示点数61点。※記念イベント(七月二十六日(日)15時〜18時30分) \*「トークショー」(斎藤由香氏(北杜夫長女・エッセイスト)講話)どくとるマンボウ家の素顔(ユーモアを大切にイキイキと生きる)・館長との対談講演(斎藤茂吉と北杜夫の昆虫逸話あれこれ)／会場(館内集會室) \*「ギャラリートーク」(昆虫解説)／新部公亮氏(日本昆虫協合理事・歌等解説)／館長(会場)館内守谷夫妻記念室 \*「ミニシアター」(コンサート)かみのやまの演奏家が奏でる(ふるさと)の夏(演奏)伊藤萌(トランプ)・神谷明希(ピアノ)演奏曲(大さき聖(斎藤茂吉作歌)・日本のあさあけ(斎藤茂吉作詞)・Summer(久石讓作曲)ほか)／会場(館内ロビー) \*「ドリンクパーティー」(かみのやまワインとソフトドリンク&茂吉・北杜氏が好んだ食材あれこれオーダブルの夕べ)／会場(館内集會室・ロビー) ※会期中の書籍販売(二冊)北杜夫原作・小林進治画コミック版『どくとるマンボウ昆虫記』小学館刊、北杜夫著『マンボウ思い出の昆虫記』信濃毎日新聞社刊。※会期中の付帯展示(昆虫スケッチ画の「昆虫スケッチ展覧会」)／会場(館内ロビー)壁面／見学者

**編  
集  
後  
記**

本紙十八号のために、花山多佳子(千葉県柏市)・谷岡亜紀(神奈川県茅ヶ崎市)・牧野房(山形県南陽市)の三氏より、玉稿を頂戴しました。諸氏のご協力には厚く御礼申し上げます。

本年度は例年にも増して茂吉文学研究の向上に繋がる多くの作品・資料などの寄贈がありました。これは、茂吉の「遺族」の「好意」によるもので、大変ありがたく思う次第です。興味深い作品の数々は、調査のうえ特別展などで逐次公開して参りたく考えております。

当館は開館から四十七年を迎えましたが、その間、平成に入ってからの大規模な改修・増築、茂吉晩年の居室展示拡張を経て、今に至ります。しかしそれらから数えても既に二十数年が経ち、五十年の節目を前に、本年度から順次、建物設備・展示内容についてリニューアルを実施して参ります。先ず空調設備改修を、この館報が発刊する本年十二月初旬から半月程休館し実施しましたが、今後とも見学の皆様には、何かとご迷惑をおかけすることになります。何卒ご理解いただければと思います。

(編集担当 村尾)

提出作品八十八点を掲示(本紙一々に関連記事掲載)／茂吉短歌ポストかかし出品時の昆虫スケッチ画の掲示(第四十五回かみのやま温泉全国かかし祭)本年九月十九日(同二十七日「九日間」)／会場(上山市市民公園)当館PRと短歌普及のため、祭会場内に短歌ポストかかし出品時に、館内掲示の昆虫スケッチ画より秀作を一括パネル化して紹介。

\*「収蔵資料展 茂吉の逸品を中心として」(会期(平成二十七年十月十日から同二十八年三月三十一日まで)／会場(館内守谷夫妻記念室)／新たに所蔵した斎藤茂吉の原稿類・家族の遺品など、斎藤家旧蔵品の中から、茂吉の文業・生活を知るうえで欠かせない逸品を中心に、資料を介して茂吉とその家族の一端に触れてもらうため開催。／主な展示資料(茂吉の半切・短冊・原稿(歌稿)・手記・メモ・旧蔵品、書簡、正岡子規画賛、家族(茂吉の養父斎藤紀一・茂吉の妻輝子)遺品・旅行土産ほか、展示点数35点。

本紙十八号のために、花山多佳子(千葉県柏市)・谷岡亜紀(神奈川県茅ヶ崎市)・牧野房(山形県南陽市)の三氏より、玉稿を頂戴しました。諸氏の協力には厚く御礼申し上げます。

本年度は例年にも増して茂吉文学研究の向上に繋がる多くの作品・資料などの寄贈がありました。これは、茂吉の「遺族」の「好意」によるもので、大変ありがたく思う次第です。興味深い作品の数々は、調査のうえ特別展などで逐次公開して参りたく考えております。

当館は開館から四十七年を迎えましたが、その間、平成に入ってからの大規模な改修・増築、茂吉晩年の居室展示拡張を経て、今に至ります。しかしそれらから数えても既に二十数年が経ち、五十年の節目を前に、本年度から順次、建物設備・展示内容についてリニューアルを実施して参ります。先ず空調設備改修を、この館報が発刊する本年十二月初旬から半月程休館し実施しましたが、今後とも見学の皆様には、何かとご迷惑をおかけすることになります。何卒ご理解いただければと思います。

(編集担当 村尾)

■利用案内	9:00~17:00(入館受付16:45まで)
開館時間	12月28日~翌年1月3日
休館日	7月第2週の7日間(日曜日~土曜日)
■入館料	一般(大人 500円・学生 250円・小人 100円)
	団体(大人 400円・学生 200円・小人 50円)
	*団体は10名様以上 *障害者割引(団体料金適用)
※音声ガイド(300円)	
斎藤茂吉の魅力と展示物・施設概要などについて詳しい解説を音声で聞くことができます。	
■交通案内	JR奥羽本線かみのやま温泉駅から 山形方面行バス約10分 茂吉記念館前バス停下車徒歩約5分 JR茂吉記念館前駅から徒歩(みゆき公園内)約3分

斎藤茂吉記念館  
〒999-3101 山形県上山市本町字野天1421  
TEL:023-672-7227(代)  
FAX:023-672-2626

■この「茂吉記念館だより」は下記URLからもご覧になれます。  
URL: <http://www.nokichi.or.jp>

■「茂吉記念館だより」に対しますご意見などはお気軽にお寄せください。  
E-mail: [kinken@nokichi.or.jp](mailto:kinken@nokichi.or.jp)